

坂口安吾「源頼朝」における幸田露伴「頼朝」の受容 ——付「青春論」と森鷗外・吉田精顕——

上田 貴美

一、はじめに——先行研究の紹介と問題の所在

坂口安吾の歴史小説・歴史評論は、彼の独自性や歴史観が表れたものとして、研究対象となってきた。総論としては、一連の歴史関連作品における、題材の選び方、素材の描き方等に共通性を見出し、発表当時の時代状況や安吾の価値観に帰結させるものが殆どとなっている。これは、浅子逸男⁽¹⁾や川村湊⁽²⁾、松本常彦⁽³⁾の論に代表される。一方で、個別の作品を取り上げる研究がある。特に、題材の同時代的資料に基づいて執筆された作品に、安吾の歴史への関心の高さを見出す典拠研究がなされてきた。例えば、谷口克広は、「信長」(『夕刊新大阪』、昭和二十七年十月六日〜昭和二十八年三月七日)が『信長公記』に取材したことを示したうえで、安吾が新たに創造した信長の性格に独自性を見出している⁽⁴⁾。また、各作品について、原卓史が詳細な典拠論を発表している⁽⁵⁾。作品を書くうえで利用された典拠としては、同時代的資料が多かったと見られている。

だが、安吾の歴史関連作品のなかには、題材の同時代的資料に即し

て書かれただけでなく、近代以降に発表された文章や文学作品を受容したと見られるものがある。これまで、このような作品に関する論考はあまり発表されてこなかった。数少ないものとしては、原が、『一流の人』(思索社、昭和二十三年一月)に金子堅太郎『黒田如水伝』(博文館、大正五年五月)の影響を⁽⁶⁾、「家康」(『新世代』、昭和二十二年一月)に山路愛山や徳富蘇峰の史伝等の影響を指摘している⁽⁷⁾。ここで、安吾作品は、人物評価・人物像造形においては先行作品を参照しつつも、独自の観点や歴史叙述の方法を見せているとして評価されている。だが、安吾が先行する文章や文学作品を受容したというのは、これらに留まらない。これまで明らかにされなかった安吾の歴史関連作品における先行作品の影響を確認し、作品の生成について考察する。また、を通して、安吾の独自性が、特に、本格的な歴史関連作品に表れること、及び、その独自性を検証する。

先行作品の受容が見られる安吾作品には、先行作品を単に転用したものと、先行作品を意識的に利用したものとがある。

本稿では、まず、先行作品を転用した例として、「青春論」(「文学界」、昭和十七年十一月)を扱う。「青春論」に関する先行研究は、安吾独自の思想や批評の手法を見出すものが殆どであり、本格的な典拠研究はなされてこなかった。だが、「青春論」における宮本武蔵像の造形・人物理解は、森鷗外と吉田精頭の文章をもとにしている。初期の気軽なエッセイである「青春論」の執筆にあたっては、手近な作家の作品が利用されたのである。

次に、先行作品を意識的に利用した例として、「源頼朝」(「オール読物」、昭和二十七年七月)を扱う。「源頼朝」は、安吾が「オール読物」に発表していた連作「安吾史譚」の一作品であり、これまで単作で扱われることも、典拠研究がなされることもなかった。だが、「源頼朝」においては、同時代的資料・近代以前の資料の使用がなされるとともに、近代以降の資料として、大森金五郎の歴史研究と、幸田露伴の作品とが取り込まれた可能性が高い。露伴作品を取り込む際、安吾は、先行作品を取捨選択的に利用するとともに、露伴作品には見られない独自の頼朝像も提示している。本格的な歴史評論である「源頼朝」の執筆にあたっては、先行作品が利用されつつも、独自性が示されているのである。

二、「青春論」に見られる受容

「青春論」(前掲)は、安吾が自らの青春や生き方について書いた随筆だが、第三章は宮本武蔵の歴史エッセイと見て差し支えない。本作

品については、原が、吉川英治の「宮本武蔵」(「朝日新聞」、昭和十七年八月二十三日)と昭和十四年七月十一日)を踏まえて書いたということを指摘している⁸⁾。執筆時期や、「宮本武蔵」に対する安吾の好意的な評価⁹⁾を見ても、安吾が「宮本武蔵」を意識した可能性は高い。だが、安吾の宮本武蔵像の造形に直接の影響を与えたのは、森鷗外「都甲太兵衛」と、吉田精頭『二刀流を語る』(教材社、昭和十六年七月)所収「武蔵の他流試合」であった。

二一・森鷗外「都甲太兵衛」

鷗外の影響から見ていく。安吾は、「五月の詩」(「現代文学」、昭和十七年十二月)において、意地っ張りな武士の小話を引いて、その出処を鷗外「都甲太兵衛」(「大阪毎日新聞」「東京日日新聞」、大正六年一月一日)だと勘違いしている。これは、彼が実際に鷗外の歴史小説にふれていたことを意味する。次いで、「都甲太兵衛」の題材人物・都甲太兵衛に目を向けると、「青春論」にこの人物が登場する。二つの文章を比べると、非常に似通ったストーリーを持つことがわかる。

【引用2】森鷗外「都甲太兵衛」

(四) 宮本武蔵が都甲太兵衛を連れて細川忠利の前に出たとき、忠利は武蔵に問うた。「これは都甲太兵衛と申す者ぢやが、此男のどう云ふ所が御身の目には留まつたか。」「それは本人に不断の覚悟をお尋なされたらわかりませう」と、武蔵は云つた。「……」都甲殿、拙者は貴殿の武道に見込があつて申し上げた。只平生の心

掛けを腹藏なく申し上げられたら宜しうござらう。」

太兵衛は暫く案じてから口を開いた。何事を答へようかと考へたのではない。答ふべき事をどう詞にあらはさうかと考へたのである。「武道と申しましても、何一つ為出来したこともござりませぬ。平生の心掛と仰せられた所から存じ寄りました事を申し上げませう。わたくしは据物¹⁰の心得と申すことに、ふと心附きまして、其工夫をいたしました。人は据物で何時でも討たれるものぢやと思つて居るのでござります。平気で討たれる心持になるのでござります。最初は動もすれば据物ぢやと云ふことを忘れてなりませなんだ。それから据ものぢやと云ふことは不斷に心得てをりまして、それが恐ろしうてなりませなんだ。段々と工夫をいたします内に、据物ぢやと存じてゐて、それがなんともなうなりました。まことにたわいもない事を申し上げまして」と云ひさして平伏した。

忠利はまだ何とも云はぬうちに、武藏が忠利に云つた。「お聴になりましたか。あれが武道でござります。」

(注・引用は、発行年代から安吾が読んだと推定される、初収単行本『山房札記』(春陽堂、大正八年十二月)に拠る。安吾生存時、「都甲太兵衛」を収める単行本は本書のみ。なお傍線部は引用者。以下同じ)

【引用3】坂口安吾「青春論」

三、宮本武藏

坂口安吾「源頼朝」における幸田露伴「頼朝」の受容

「…」晩年宮本武藏が細川家にゐるとき、殿様が武藏に向つて、うちの家来の中でお前のメガネにかなふやうな剣術の極意に達した者がゐるだらうか、と訊ねた。すると武藏が一人だけござりますと云つて、都甲太兵衛といふ人物を推奨した。「…」殿様も甚だ呆れてしまつて、どこにあの男の偉さがあるのかと訊いてみると、本人に日頃の心構へをお訊ねになれば分りませう、といふ武藏の答へ。そこで都甲太兵衛をよびよせて、日頃の心構へといふものを訊ねてみた。

太兵衛は暫く沈黙してゐたが、さて答へるには、自分は宮本先生のおメガネにかなうような偉さがあるとは思はないが、日頃の心構へといふことに就いてのお尋ねならば、なるほど、笑止な心構へだけれども、さういふものが一つだけあります。「…」結局、いつ殺されてもいいといふ覚悟が出来れば救はれるのだといふことを確信するに至つた。そこで夜ねむるとき顔の上へ白刃をぶらさげたりして白刃を怖れなくなるやうな様々な工夫を凝らしたりした。そのおかげで、近頃はどうやら、いつ殺されてもいい、といふ覚悟だけは出来て、夜も安眠できるやうになつたが、これが自分のたつた一つの心構へとでも申すものでありませうか、と言つたのだ。すると傍にひかえてゐた武藏が言葉を添へて、これが武道の極意でござります、と言つたといふ話である。

鷗外が「都甲太兵衛」を執筆する際、武藏遺蹟顕彰会『宮本武藏』¹¹(以下顕彰会本と呼ぶ)と『都甲文書』¹²を下敷きにしたこと

は先行研究で明らかにされている¹³⁾。顕彰会本は都甲太兵衛の逸話を収めており、そこには、

① 武蔵が太兵衛の力を認めたこと

② 築城に際し、太兵衛は石泥棒の嫌疑をかけられたが、無実を示すため、取り調べにあたっては口を割らなかつたこと

の順で記載される。「据物の心得」は、②の補足として述べられているのであり、①と同じ場で「据物の心得」が明らかになったわけではない。また、『都甲文書』には、右とほぼ同一内容の逸話が見られるものの、太兵衛が「据物の心得」を述べた後をついで、そのためにその後の原城攻めで武功を挙げる事ができた、としている。ちなみに、武蔵の伝記である『武公伝』¹⁴⁾及び『二天記』¹⁵⁾では、都甲太兵衛ほど鋭気のある人は見たことはないと言及し、武蔵が語った、という程度のことしか述べられない。つまり、都甲太兵衛の「据物の心得」という答えを受けて、武蔵が「これこそ武道」と答えるのは、鷗外の創作なのである。したがって、「都甲太兵衛」を転用しない限り、「青春論」において、傍線で示したような独自の記述は生じえない。安吾は、直接「都甲太兵衛」に拠っており、この点から、安吾の武蔵理解に鷗外の影響があったと言える。

二―二 吉田精頭「宮本武蔵の戦法」といふ文章

また、安吾の武蔵像は、武術家・吉田精頭の文章からも影響を受けている。「青春論」において安吾が扱っている巖流島の戦いの場面は、吉田の「宮本武蔵の戦法」といふ文章」を引いていることが、作中

言及されているのである。

典拠関係について確認する前に、書誌を整理しておく。まず、安吾が引いている吉田の「宮本武蔵の戦法」といふ文章」は見当たらなかった。安吾が「宮本武蔵の戦法」とする文章は、武蔵が若いころに経験した他流試合を列挙・分析したものであるが、これと、試合の順序・内容・表現・表記ともに大部分一致するのは、同著者による『二刀流を語る』（教材社、昭和十六年七月）所収「武蔵の他流試合」である。あるいは、「武蔵の他流試合」が雑誌などに発表された初出時の表題が「宮本武蔵の戦法」だった可能性もあるが、そのような事実は確認できなかった。また、『二刀流を語る』には、所収作品の初掲載時に関する注記がないことから、本書所収作品は本書に書き下ろされたもので、雑誌などに発表された後に収録されたわけではないようである。したがって、安吾が挙げる「宮本武蔵の戦法」は、「武蔵の他流試合」の作品名を間違えたか、前年発表の書からの引用ゆえに、故意に別の名前に変えたと考えられる。だが、安吾自身が吉田の名前を挙げていることから、単に作品名を間違えた可能性が高い。以下、「宮本武蔵の戦法」といふ文章」と見られる「武蔵の他流試合」を、吉田文と呼ぶこととする。

問題とするのは、「青春論」と吉田文の次の部分である。

【引用4】坂口安吾「青春論」

これとほぼ同じ見解の相違が、佐々木小次郎と武蔵の間にも見ることが出来る。[…]

小次郎は待ち疲れて大いに苛立つており、武蔵の降りるのを見ると憤然波打際まで走つてきた。

「時間に遅れるとは何事だ。気おくれがしたのか」

小次郎は怒鳴つたが、武蔵は答へない。黙つて小次郎の顔を見てゐる。武蔵の予期の通り小次郎益々怒つた。大剣を抜き払ふと同時に鞘を海中に投げすて、構へた。

「小次郎の負けだ」と武蔵が静かに言つた。

「なぜ、俺の負けだ」

「勝つつもりなら、鞘を水中へ捨てる筈はなからう」

この問答は武蔵一生の圧巻だと僕は思ふ。武蔵はとにかく一個の天才だと僕は思はずにゐられない。たゞ彼は努力型の天才だ。堂々と独自の剣法を築いてきたが、それはまさに彼の個性があつて初めて成立つた剣法であつた。彼の剣法は常に敵に応じる「変」の剣法であるが、この最後の場へ来て、鞘を海中へ投げすてた敵の行為を反射的に利用し得たのは、彼の冷静とか修練といふものも有るかも知れぬが、元来がさういふ男であつたのだ、と僕は思ふ。

【引用5】吉田精顕「武蔵の他流試合」

武蔵と佐々木小次郎との試合は、「巖流島試合」の名で世に知られてゐる。[…]

即ち、彼は武蔵が彼方で舟を下りる姿を見ると、憤然として立ち上り、波打ち際へ駆け出した。そして武蔵へ怒鳴るやうにいつた。

「時刻に遅れるとは何事だ！ 気遅れがしたのか」

だが、武蔵は聞こえぬふりをしてゐた。これは敵を怒らせるためではあつたが、実はこの時既に、武蔵は小次郎の様子を透して、その心の動き方を観察し始めてゐたのである。

それに気付かぬ小次郎は、いよ／＼怒りを現はして、長光の大剣を抜き放つと同時に、鞘を投げ捨てた。鞘は飛んで水中へ。その有様を見た武蔵は、わざ／＼立ち停つて、

「小次郎の負けだ」と笑ひながらいふ。

赫つとなつた小次郎が、

「何故、私の負けか」と、烈しく問ひ返す。

「勝つ気なら、鞘を水中へ捨てずともよからう」と武蔵の揶揄。怒りの極に達した小次郎は、言葉の代りに大剣を真甲に振り冠つた。

この場面は、「巖流島の戦い」として知られる、武蔵と佐々木小次郎の決闘を書いたものである。「小次郎の負けだ」、「なぜ、俺の負けだ」、「勝つつもりなら、どうして鞘を捨てた」というこの「問答」が、両者共通している。安吾は知らないが、吉田文の依拠するのは顕彰会本の創作したエピソードであり⁽¹⁶⁾、安吾はそれを更に引用したものと見られる。「二一」で見たように、安吾が顕彰会本を見た様子は面白い。この点からも、安吾が、「青春論」を書くにあたって本格的な文献渉猟や資料批判をせずに、手近な作品を利用していたことが確認できる。

二―三、安吾の武蔵像の造形

以上をもとに、安吾の武蔵像の造形を考察する。安吾は、「晩年の悟りすました武蔵はとにかくとして、青年客気の武蔵は之亦稀有な達人であつたといふことに就て、僕は暫く話をしてみたい」として、晩年の武蔵よりも青年期の武蔵を評価する。その際、それぞれの時期の武蔵を象徴する逸話として挙げているのが、晩年期は都甲太兵衛の推挙であり、青年期は「巖流島の戦い」での「問答」を含む、武蔵の他流試合である。それも、典拠となる作品をほぼ転用するかたちで挙げている。即ち、「青春論」が書かれる際には、限定的な資料が無批判に使用され、他資料との比較検討がなされていないかった。

したがって、かねてより安吾が持っていた武蔵像を描くために、鷗外作品や吉田文から適した逸話を選択したと見るのは適当でない。武蔵を描こうとするにあたって、武蔵理解が試みられた結果、先人の創作のうえに安吾の武蔵像が形成されたと見るのが妥当であろう。

このようなことが起こった理由としては、「青春論」が、安吾の歴史関連作品のなかでは初期のものであるとともに、本格的な歴史評論ではなく、気軽なエッセイであるということが想定される。

「青春論」は、昭和十七年に発表されたものであり、安吾が歴史評論・歴史小説を手掛けた昭和十五年～昭和三十年^①のなかでは、初期の作品にあたる。「家康」（『新世代』昭和二十二年一月）や「信長」（『夕刊新大阪』昭和二十七年十月六日～昭和二十八年三月七日）、「飛鳥の幻——吉野・大和の巻」（『文芸春秋』昭和二十六年六月）など中期・後期の歴史小説・歴史評論においては、独自調査の努力が認められる。

実際、自ら現地調査をしたことが、作品内外で言及されている。「青春論」の段階では、資料の批判・検討が不十分であるなど、歴史関連作品を書くにあたって未熟であった可能性が考えられる。

だが、単純に、初期作品であるから未熟であるというわけではない。なぜなら、「島原一揆異聞」（『都新聞』昭和十六年六月五日～七日）や「島原の乱雑記」（『昭和文学』昭和十六年九月）等、同時期の他の歴史評論においては、現地調査とともに文献渉猟をしている様子が記録されているからである。これらの歴史評論は、安吾が構想していた歴史小説「島原の乱」（未完）の下地となるものであった。そのため、安吾は、小説を書くことが決まってはじめて、資料を検討したり自ら調査したりしたと見るのが適当である。「青春論」は、本格的な歴史関連作品ではないために、手近な先行作品が利用されたと考えられる。

三、「源頼朝」に見られる受容

初期の「青春論」では先行作品の転用が見られたが、後期の作品でも、先行作品の受容を見ることができるといえる。その具体例として、「源頼朝」（『オール読物』昭和二十七年七月）を扱う。

「源頼朝」は、連作「安吾史譚」のひとつとして発表された歴史評論である。この作品で頼朝や周辺人物を描くにあたり、安吾は、まず、『吾妻鑑』や『平治物語』等の同時代的資料・近代以前の資料にあたるなどの独自調査を行っている。また、資料の利用として、近代以降の歴史研究書を用いたことが推測される。だが、それだけでなく、幸

田露伴の作品を利用したであろう箇所が散見される。加えて、独自の頼朝像をも提示している。

本文のトピックは以下の通りである。頼朝の人生に即してほぼ時系列になっているが、(3)、(23)、(32)のように、トピックに関連させて、別の時期のトピックを挿入する場合は見られる。

- (1) 顔大短身
- (2) 平治の乱後・敗走
- (3) 頼朝のサレコウベ
- (4) 青墓での潜伏
- (5) 兄たちの死
- (6) 父義朝の死
- (7) 母の出自
- (8) 京都潜伏中の悪源太義平
- (9) 平家に捕縛されること
- (10) 池の尼による助命
- (11) 伊豆での読経生活・法音尼による供養
- (12) 伊東三女との恋
- (13) 伊東三女Ⅱ「八重子」
- (14) 日暮の森での密会
- (15) 伊東祐親の千鶴殺し
- (16) 伊東祐親の頼朝襲撃
- (17) 頼朝の伊東脱出
- (18) 北条政子への恋文・宛先違い
- (19) 政子の山木判官への嫁入り
- (20) 頼朝と政子の駆け落ち
- (21) 三善康信からの都通信
- (22) 文覚
- (23) 幼少期、敵を切り捨てること
- (24) 拳兵
- (25) 石橋山①三百騎の手勢
- (26) 石橋山②大庭三郎との対峙
- (27) 石橋山③山中逃走
- (28) 石橋山④梶原景時に見逃されること
- (29) 石橋山⑤鬻の中の観音像
- (30) 土肥実平の手引き・房州への脱出
- (31) 上総権介広常への叱責
- (32) 佐々木兄弟への感涙

三―一 同時代的資料、近代以前の資料

「源頼朝」を読むと、一見、多くの同時代資料に拠ったかのようにも見えるが、実は近代の活字文献・史書を活用した箇所が多い。だが、まずは原資料にある対応関係をトピック順に見ておく。近代以降の文献・資料との関係が推測される場合は注記する。「源頼朝」には、次に挙げる文献・資料に確認できるトピックが多く含まれる。

・『平家物語』流布本・野村宗朔校注『平家物語』、武蔵野書院、昭和十一年三月。

・『平家物語』覚一本・山田孝雄校注『平家物語』、宝文館、昭和八年六月。

・『平家物語』延慶本・吉沢義則校注『応永書写延慶本平家物語』、改造社、昭和十年二月。

・『平家物語』劍卷・永井一孝校注『平家物語』、有朋堂、昭和二年三月。

・『平治物語』流布本・日本文学大系『保元物語平治物語平家物語』、誠文堂、昭和六年九月。

・『源平盛衰記』流布本・石川核校注『源平盛衰記』、有朋堂、昭和二年五月。

・『源平盛衰記』慶長古活字本・古谷知新校注『源平盛衰記』、国民文庫刊行会、大正十年五月。

・『吾妻鑑』・国書刊行会『吾妻鑑』、大観堂、昭和十八年四月。
・『曾我物語』・穴山孝道校訂『曾我物語』上巻、岩波書店、昭和

十四年十月。若槻忠信編『坂口安吾蔵書目録』（新津市文化振興財団、平成十年八月）に書名を確認できる。

「平治物語」諸本は『参考平治物語』（今井弘済ら校訂『参考平治物語』¹⁸）、国書刊行会、大正三年八月）に、「源平盛衰記」諸本は『参考源平盛衰記』（近藤瓶城編『史籍集覧編外3』）『史籍集覧編外5』、近藤出版部、明治四十年四月～五月）にまとめられていることから、「平治物語」や「源平盛衰記」に関しては、安吾がこれら二冊を用いた可能性も考えられる。本稿では、各資料について、「…」以下、時期的に安吾が手にした可能性がある書籍に基づいて確認し、「平治物語」「源平盛衰記」については、更に前出二冊にも基づいて確認した。

(1) 顔大短身・頼朝の外見の特徴を述べる。頼朝を「顔大」とするものには、『平家物語』流布本巻第八「征夷大將軍院宣」における「顔大」にして短かりけり」という記事、ならびに、『平家物語』覚一本巻第八「征夷大將軍院宣」における「顔大にして背低かりけり」という記事がある。また、『源平盛衰記』流布本巻第三十三においても、「顔大にして長^たひきく」という記事（『参考源平盛衰物語』にも記載）があり、安吾がこれらの記事にあたった可能性は考えられる。だが、「顔大短身」という対句的な表現は、歴史研究家の大森金五郎が用いたものであり、大森の著書に影響を受けた可能性が高い。これについては、「三一二」で後述する。

(2) 平治の乱後・敗走・平治の乱後、敗れた源義朝一行が落ち延び

る様子を描く。『平治物語』流布本巻之二「義朝敗北事」の叙述内容（『参考平治物語』にも記載）と一致し、これを参考にした可能性がある。

(3) 頼朝のサレコウベ・本文「当寺の寺宝頼朝公十三歳のサレコウベでござい、という笑い話」とあり、古典落語「開帳の雪隠」などに見られる著名な話である。『評判落語全集 下巻』（大日本雄弁会講談社編、昭和八年九月）所収の「開帳」には、「尤もこれは頼朝公三歳の折の髑髏なり」という台詞が見られる。「十三歳」のサレコウベというのは安吾の記憶違いと見られるが、話芸のネタとして、「頼朝のサレコウベ」が定着していたのは確かである。なお、安吾がどのように知ったかは特定できなかった。

(4) 青墓での潜伏・父義朝と別れた頼朝が、青墓に潜伏する様子を描く。『平治物語』流布本巻之二「頼朝下着青墓事」の叙述内容（『参考平治物語』にも記載）と一致し、これを参考にした可能性がある。

(5) 兄たちの死・次兄朝長の死、長兄義平の死を描く。朝長の死については、『平治物語』流布本巻之二「義朝落著青墓事」の叙述内容に一致し、義平の死については、『平治物語』流布本巻之三「悪源太被誅事」の叙述内容に一致する。それぞれ参考にした可能性がある。（とにも『参考平治物語』に記載）

(6) 父義朝の死・義朝が、入浴中、長田忠到・景到親子に襲撃され落命する様子を描く。「源頼朝」のように、玄光法師が追手から逃げる際に馬に逆さに乗り捨て台詞を吐くという記述を持つものは、『平治物語』京師本、杉原本、鎌倉本、半井本である。だが、これらが翻刻・出版され、公に閲覧しやすくなったのは、『参考平治物語』以降

である。また、これら諸本を収める書籍はあるものの、管見の限り、その全てが『参考平治物語』水戸本に依拠する。このことから、安吾が『参考平治物語』を参照にしていた可能性が高いと思われる。

(7) 母の出自・頼朝の生母を、熱田神宮の宮司の娘であるとする。

これは、『平家物語』剣巻の叙述内容、『尊卑分脈』源頼朝の条(藤原公定撰『新編纂図本朝尊卑分脈系譜雜類要集』巻八、吉川弘文館、明治三十六年)三十七年)に見られる「母熱田大宮司藤原季範女」という記事内容に一致し、これが採用された可能性はある。ちなみに、『尾張名所図会』前四(大日本名所図会刊行会編『尾張名所図会』上、大正八年一月)にも、頼朝の出生地として熱田神宮西の誓願寺が記載されている。「三一二」にて述べる。

(8) 京都潜伏中の悪源太義平・清盛の命を狙い京都に潜伏するも捕縛される義平を描く。『平治物語』流布本巻之三「悪源太被誅事」の叙述内容と一致し、これを参考にした可能性はある。(『参考平治物語』にも記載)

(9) 平家に捕縛されること・頼朝が宗清に捕縛され、「命が惜しいか」と問われる場面を描く。『平治物語』流布本巻之三「頼朝被生捕附常磐落事」の叙述内容と一致し、これ参考にした可能性はある。(『参考平家物語』にも記載)

(10) 池の尼による助命・捕えられた頼朝が、平清盛の義母池の禪尼により、死罪を免れる様子を描く。『平家物語』延慶本巻第四三三七「大政入道院の御所に参り給ふ事」や『平治物語』流布本巻之三「頼朝被生捕事附常葉落事」・「頼朝遠流事附盛安夢合事」(『参考平治物語』に

も記載)の叙述内容、及び、『愚管抄』治承四年六月二日の記事内容(遠藤元男校註『愚管抄』、雄山閣、昭和十一年一月)に一致する。池の尼の「この度生きながらえているのは――上田)フシギの命と思ひ精進なさい」という台詞内容の一致から、『平家物語』を参考にした可能性が考えられる。

(11) 伊豆での読経生活・法音尼による供養・伊豆に配流された頼朝が、日課として、千回は父祖のため、百回は鎌田政清のために読経を行っており、戦に忙しくなつてからは、法音尼に勤行を代行させたとする。これは、『吾妻鑑』治承四年八月十八日の記事内容、及び、付属の目録(法音尼に代行させた、頼朝の日常の所作についての目録)「阿弥陀佛名千百反、一千反者、奉為父祖頓證菩提、百反者、左兵衛尉藤原

正清得道也」と一致している。これを参考にした可能性もあるが、前出大森の著作の影響を受けた可能性もある。「三一二」で述べる。

(12) 伊東三女との恋・頼朝が、伊東配流時代に伊東祐親の三女と恋に落ちたとする。『平家物語』延慶本巻第四三三八「兵衛佐籠伊豆山事」、『曾我物語』巻第二「よりとものわか君の御事」の叙述内容と一致する。ただし、「三一三」で示すように、伊東三女の名前を出す資料は少ない。

(13) (14) は後述する。

(15) 伊東祐親の千鶴殺し・京都大番役を終え伊東に帰ってきた祐親が、頼朝と娘の間に生まれた千鶴を見つけ、部下に命じて川に投げ入れたとする。『平家物語』延慶本巻第四三三八「兵衛佐籠伊豆山事」、『源平盛衰記』慶長古活字本巻第十八「文覚頼朝勸進謀叛事」(『参考平治

物語』にも記載)、『曾我物語』流布本巻第二「よりとものわか君の御事」等の叙述に同内容が確認できる。これらのうち、記述事項の一致から『曾我物語』を参考にした可能性がある。

(16) 伊東祐親の頼朝襲撃・平家からの報復を怖れた祐親が、頼朝を殺そうと兵を向けたとする。『平家物語』延慶本巻第四三十八「兵衛籠佐伊豆山事」、『曾我物語』流布本巻第二「頼朝伊東の館を出北条にうつり給事」、『源平盛衰記』慶長古活字本巻十八「文覚頼朝勸進謀叛事」(『参考平治物語』にも記載)等の叙述内容と一致し、いずれかを参考にした可能性はある。

(17) 頼朝の伊東脱出・祐親を怖れた頼朝が、夜中に「大鹿毛」という馬にまたがって逃げ出したとする。『平家物語』延慶本巻四三十八「兵衛籠佐伊豆山事」、『曾我物語』流布本巻第二「頼朝伊東の館を出北条にうつり給事」、『源平盛衰記』慶長古活字本巻十八「文覚頼朝勸進謀叛事」(『参考源平盛衰記』にも記載)等の叙述内容と一致するが、馬の名前を「大鹿毛」とするのは『曾我物語』であり、これを参考にした可能性はある。

(18) 北条政子への恋文・宛先違い・頼朝が伊東脱出後、北条の二女に手紙を出した際、使いが宛先を二女から長女(政子)に変えて渡したとする。『曾我物語』流布本巻第二「時まさがむすめの夢のこと付たち花の事」の叙述内容と一致し、これを参考にした可能性がある。

(19) 政子の山木判官への嫁入り・頼朝と政子の関係を知った北条時政が、政子を山木判官に嫁がせたとする。『曾我物語』流布本巻第二「北条、かねたかをむこにとる事付けんぎうしよくじよの事」、『源平盛衰

記』慶長古活字本巻第十八「文覚頼朝勸進謀叛事」(『参考源平盛衰記』にも記載)等の叙述内容と一致する。いずれかを参考にした可能性もあるが、「三一」で述べる。

(20) 頼朝と政子の駆け落ち・山木判官に嫁入りの直後、政子が逃げ出し、頼朝と伊豆山中に籠もったとする。『曾我物語』流布本巻第二「北条、かねたかをむこにとる事付けんぎうしよくじよの事」、『源平盛衰記』慶長古活字本巻第十八「文覚頼朝勸進謀叛事」(『参考源平盛衰記』にも記載)等の記事内容と一致し、いずれかを参考にした可能性はある。(15) 以下、いままでの例から見て、『曾我物語』に拠った可能性が高い。

(21) 三善康信からの都通信・頼朝が、拳兵に先立ち、乳母の妹の子の三善康信に都の様子を月三度連絡させたとする。『吾妻鑑』治承四年六月十九日の記事内容と一致し、これを参考にした可能性はある。また、「三一」にても後述する。加えて、安吾所蔵の露伴『頼朝』には、三善康信が都の様子を伝えていたと記す箇所は傍線が施されており、こちらを参照した可能性が高い。「三一」でも後述する。

(22) 文覚・『平家物語』延慶本巻第八「文覚ヲ便ニテ義朝ノ首取寄事」、『源平盛衰記』慶長古活字本巻十九「義朝首出獄事」(『参考源平盛衰記』にも記載)の叙述内容と一致し、いずれかを参考にした可能性はある。

(23) 幼少期、敵を切り捨てること・平治の乱後、父や兄弟とはぐれた頼朝が、敵に襲われた際ためらわずに切り捨てたとする。『平治物語』流布本巻之二「義朝落着青墓事」(『参考平治物語』にも記載)の叙述内容と一致し、これを参考にした可能性はある。

(24) 挙兵・頼朝が平氏打倒の挙兵をした様子を描く。『吾妻鑑』治承四年八月十七日の記事内容と一致し、これを参考にした可能性がある。

(25) 石橋山①三百騎の手勢・挙兵当初、頼朝が三百騎しか集められなかったとする。『吾妻鑑』治承四年八月二十三日の記事内容と一致し、これを参考にした可能性がある。

(26) 石橋山②大庭三郎との対峙・敵方として、大庭景親が三千騎を率いて参戦したとする。『吾妻鑑』治承四年八月二十三日の記事内容と一致し、これを参考にした可能性がある。

(27) 石橋山③山中逃走・石橋山の戦いで敗北した頼朝軍が、嵐のなか、山中を逃げ回る様子を描く。『吾妻鑑』治承四年八月二十四日の記事内容と一致し、これを参考にした可能性がある。

(28) 石橋山④梶原景時に見逃されること・石橋山山中に潜伏していた頼朝が、梶原景時に見つかると、景時が平氏軍を別の方向に誘導して難を逃れたとする。『吾妻鑑』治承四年八月二十四日の記事内容と一致し、これを参考にした可能性がある。

(29) 石橋山⑤鬻の中の観音像・逃走中の頼朝が、敵に捕縛された後に辱めを受けることを怖れて、鬻の中に潜ませていた持仏を、山中に安置したとする。『吾妻鑑』治承四年八月二十四日の記事内容と一致し、これを参考にした可能性がある。

(30) 土肥実平の手引き・房州への脱出・石橋山合戦での敗北の後、土肥実平に導かれて、房州へ脱出する一連の流れを描く。『吾妻鑑』治承四年八月二十八日の記事内容と一致し、これを参考にした可能性がある。

(31) 上総権介広常への叱責・反平氏の兵を募集した際に、遅参した上総広常を一喝する頼朝を描く。『吾妻鑑』治承四年九月四日の記事内容と一致し、これを参考にした可能性がある。

(32) 佐々木兄弟への感涙・山木判官襲撃時に、遅参した佐々木兄弟を見て感涙する頼朝を描く。『吾妻鑑』治承四年八月十七日の記事内容と一致し、これを参考にした可能性がある。

以上に示したように、作品の前半（頼朝幼少期〜十三歳での伊豆配流）は『平治物語』や『平家物語』を、中盤（伊豆での生活〜北条氏方への逃亡）は『曾我物語』や『源平盛衰記』を、作品後半（挙兵と石橋山の戦い、それ以降）は『吾妻鑑』を主に参考にしたと見られる。補足資料としては、『愚管抄』等を用いたようである。特に、『曾我物語』と『愚管抄』に関しては、若槻忠信編『坂口安吾蔵書目録』に書名を確認でき¹⁹⁾、参考にした可能性が高い。だが、扱われているトピックの多くは、史書原本に拠って書かれた可能性のほかに、『参考平治物語』や『参考源平盛衰記』といった、史料を集積した書籍に基づいて書かれた可能性がある。

加えて、注記したように、同時代的資料や近代以前の資料に直接拠ったのではなく、近代以降の別の資料を用いた可能性がある箇所がある。また、同時代資料や近代以前の資料に基づくだけでは記述できない情報が見られる箇所がある。次項ではこれらを取り上げる。

三―二、近代以降の資料①大森金五郎『武家時代之研究』

まず、近代以降の資料を用いた可能性のある箇所について見ていく。

安吾の蔵書には、大森金五郎『武家時代之研究』第三卷（富山房、昭和十二年三月）があり、安吾が同書を用いた可能性が高い。

安吾は、(1) 顔大短身において、頼朝の容貌を「顔大短身」と表現しているが、これは同時代的資料や近代以前の資料に見られない。頼朝の容貌について書かれた『平家物語』には、「顔大」は見られても、背が低いという特徴を表すのに「短身」という語は用いられない。「背短かりけり」（流布本）や、「背低かりけり」（覚一本）のように書かれるのである。頼朝を「短身」としたうえで、「顔大短身」と対句的に表現するのは、大森金五郎『武家時代之研究』第三卷である。

【引用6】坂口安吾「源頼朝」

「顔大短身」と唱えると呪文のように語呂がよろしいが、頼朝がこう呼ばれているのである。顔が大きくて身体がその割に小さかつたという。子供のころは大きな顔をもてあましてヨチヨチ歩いていたかも知れぬ。

【引用7】大森金五郎『武家時代之研究』第三卷「第一 源頼朝」
「私人としての頼朝」

平家物語のいふ所によれば「……顔大にして少し短き太に見え候、かたち優美にて言語分明なり」とある。また山城神護寺所蔵の彼の書像（国宝）を見ると、稍貴公子の風に見える。鎌倉補陀落寺

所蔵の像にて見れば顔大短身にも見える。何れにしても優美であった事は疑はれない。

このことから、安吾が『武家時代之研究』を参照していた可能性が高い。同書は、トピック毎に、いくつもの関係資料まとめて紹介・解説するものであり、読者は、トピックの原典に容易に辿り着くことができる。前述した、(7) 母の出自、(19) 政子の山木判官への嫁入り、(21) 三善康信からの都通信についても、同書「正編（第一）鎌倉時代（其一）第一頼朝」（p.30、p.98、p.36）に記載されている。

以上より、頼朝の事実上の情報を得る目的で、「三一」にて紹介した資料の他に、『武家時代之研究』を利用した可能性がある。特に、(11) 伊豆での読経生活・法音尼による供養に見られる、頼朝の伊東での生活態度は、同書から採用された可能性を持つ。頼朝伊東配流時の記録は少なく、「三一」で述べたように『吾妻鑑』に見られるものが唯一だと言つてよい。その『吾妻鑑』の記録も、前述した通り、日課を目録にした程度のものである。だが、この部分は『武家時代之研究』に取上げられており、「伊豆での頼朝は念仏三昧の日々を送った」という資料解釈が、大森と安吾とで一致する。ここから、安吾が『吾妻鑑』の内容を、『武家時代之研究』を経由して摂取した可能性が考えられる。

【引用8】坂口安吾「源頼朝」

ところが蛭ヶ小島へ流された頼朝はそれからのまる二十年間と

いうもの、ちょっと恋などということもしたが主として念仏三昧に日を暮した。二十年間一日も欠かさずに一日に千百べんずつ念仏を唱えていた。千百反というのは変な勘定のようにだが、千べんは父祖のため、百べんは鎌田政清のためだ。おまけに二十年目に忙しくなつて念佛を唱える暇がなくなると伊豆山の法音尼にたのんで、代わりに念佛を唱えてもらった。〔…〕

【引用9】大森金五郎『武家時代之研究』第三卷「第一源頼朝」「三伊豆配流中の頼朝」

治承四年八月十八日の条には「頼朝は年来の間論争せず、毎日の勤行等をも怠らなかつたが、自今以後は戦にも交はるから、心ならずも定めし怠慢に及ぶべき事を嘆息され、伊豆山から法音と号する尼（夫人政子の経師）を召し、日々の所作につき目録を遣はされた」とある。〔…〕右（『吾妻鑑』治承四年八月十八日の記事の付録目録、日に阿弥陀仏名を千百回唱えたという記述が引用されている——上田）のうち一千反は父祖頼證菩提のため、百反は左兵衛尉藤原正清が得度のためとある。〔…〕後の阿弥陀佛名一千反は父祖頼證菩提とあれば、両親並びに祖父の為義などの菩提の為主であつた事と思はれる。藤原正清とは即ち鎌田政家であつて、父と共に尾張の内海で不慮の死を遂げた者であるから、夫等の菩提を弔はれたのである。〔…〕斯様な話で頼朝は配流中にあつても相当に日課に逐はれ、虚日といふものはなかつたかと思はれる。

ただし、安吾が『吾妻鑑』に直接拠つた可能性もあり、後述するよ
うに、露伴「頼朝」から影響を受けた可能性もある。次項では、これ
を含む露伴の影響を指摘する。

三―三― 近代以降の資料②幸田露伴「頼朝」

安吾「源頼朝」には、同時代資料や近代以前の資料に基づくだけでは記述できない、(12)伊東三女との恋、(13)伊東三女Ⅱ「八重子」、(14)日暮の森での密会の記述がある。これらに関する記述を持つものには、幸田露伴「頼朝」（東亜堂書房、明治四十一年九月）があり、安吾が同作品を参考にしていた可能性が高い。

安吾は、「五月の詩」（前出）で、露伴作品に言及している。ここで安吾は、鷗外作品の場合と同様、意地つ張りな武士の小話を挙げて、露伴の小説だと勘違いをしているが、これは彼が露伴の歴史小説にふれていたことを意味する。そのため、同じ素材を扱うにあたり、露伴「頼朝」を無視していたとは考えにくい。安吾が露伴「頼朝」（若月忠信編『坂口安吾蔵書目録』から安吾が読んだと推定される『史伝小説集 巻一』（中央公論社、昭和十七年三月））に依り、本書を参照していたことを確認する。

三―三― 情報源としての利用——典拠関係の根拠

安吾が露伴「頼朝」を参照していた可能性は、「頼朝」を収める『史伝小説集 巻一』を安吾が所蔵していたこと、同蔵書に傍線が施されており安吾が実際に読んでいた様子が確認できること²⁰、頼朝の流

人時代の恋人の名前が一致することから、極めて高い。安吾によって傍線が施された箇所には、本稿「三一」の(21)三善康信からの都通信に該当する文章がある。以下二例に施した傍線は、安吾所蔵の『史伝小説 卷一』に確認できる傍線を再現したものである。

【例1】安吾所蔵『史伝小説集 卷一』

頼朝は、蛭が小島に蟄伏して居ても、乳母の妹の子の三善康信といふものから、一月に三度づ、京都の様子通信を受け取つて居たほどの抜け目の無い人であるが (p.151, 15-16)

【例2】安吾所蔵『史伝小説集 卷一』

何時の頃からか散位三善康信の音信を月に三度づ、得て、洛中の巨細の様子をば窺ひ知つて居たので、八月十七日の鬱懷爆裂して終に山木判官を血祭りにしたのも、六月の十九日に康信からの特別の使が有つて、高倉宮の令旨を請けたものは追討せらる可きの事（じ）ゆるゆえ [...] (p.161, 110-p.162, 12)

ここでは、実際の作品執筆にあたって安吾が参照していたことを示すため、特に内容面での一致である、頼朝の流人時代の恋人の名前の一致、並びに恋の描き方を取り上げる。

頼朝は、平治の乱で敗れ、伊豆に配流される。その後、伊豆の伊東の領主、伊東祐親の三女と恋に落ちる。だが、頼朝の伊豆配流時代に關しては資料が少なく、自ずと、当時の恋に關しての資料も少ない。

本稿「三一」の(12)伊東三女との恋の項で見たように、伊東時代のことは実録類には見られず、頼朝が伊東三女と恋愛関係にあったとする『曾我物語』や『源平闘諍録』においてさえ、三女の名前は明かされない。だが、露伴は、三女の名前を「八重」と断定する。出口智之によれば、三女の名前を「八重」とするにあたって、露伴は、『増訂豆州志稿』²⁾に記載される「音無明神同村竹之内増村社音無神社祭神不詳、相殿八重姫」(卷九上・神祠)という記事を利用したという²⁾。音無神社とは、伊豆にある神社であり、頼朝と伊東三女が密会をしたという伝説を残す神社である。この伝説は、同じく『増訂豆州志稿』卷九上の「寛永十八年棟札ニ云豊御玉命トモ豊玉姫命共云ト又相伝フ伊東祐親ノ女八重姫ヲ祀ルト増音無社ニ在リ源頼朝密ニ八重姫ト会セシ所、故ニ音無ト称スト」という記事から、寛永一八年(一六四一年)の時点で確立していたと見られる。民間伝承のレベルでは、江戸時代には既に、頼朝の恋人の名前が「八重姫」だという認識があつたのである。露伴は、以上のことを踏まえ、「八重」の名を採用したと見られる。ところが、露伴は、「頼朝」のなかで「八重」を表記するにあたり、「(お)八重(さん)」、「八重子」、「八重姫」の三種類を用いている。また、使用回数は順に、三回、十四回、十一回となっている。露伴は、女性名に使われる接尾辞「子」を独自に付けた名前「八重子」を、最も多く使用しているのである。そして、安吾「源頼朝」では、露伴オリジナルの名前である「八重子」のみが採用されている。このことから、安吾は『増訂豆州志稿』を見たのではなく、露伴「頼朝」を利用した可能性が高い。安吾によって、『史伝小

説集 卷二」に傍線が施された箇所、及び傍線を含む見開きページ内にある「八重」の表記は、四例中四例が「八重子」である。

【引用10】坂口安吾「源頼朝」

無為の二十年の終りの方で、彼は恋愛というイキなことをした。相手は伊東祐親の娘の八重子である。

【引用11】幸田露伴「頼朝」

そこで頼朝は因縁有つて祐親の三番目の娘のお八重さんといふのと恋に落ちたのである。祐親の三女の名を八重子と云つた事は、別に古い書には見当たらずであるが、伊豆に今猶存して居る伝説で有つて、伊東の竹の内の音無しの杜にある音無明神の、祭神は不詳であるが、相殿は八重姫と云ふ事なのである。

なお、安吾は、昭和二十四年八月から昭和二十七年二月にかけて伊東に在し²³⁾、市内の地理に精通していたこと²⁴⁾から、頼朝の恋人が「八重姫」であるという伝承に触れていた可能性も考えられる。だが、実作において「八重姫」ではなく「八重子」を採用していること、及び、「源頼朝」執筆時の昭和二十七年七月には群馬県桐生市に移っていたことから、執筆の際の資料としては、書籍資料である露伴「頼朝」を利用したと見るのが妥当であろう。

他に安吾が読んでいた可能性のあるものとして、山路愛山や吉川英治の頼朝作品があるが、愛山は、頼朝と関係した女性のリストに伊東

三女そのものを挙げておらず²⁵⁾、吉川は、「伊東祐親の息女」、「伊豆の女」として、三女の名前を出さない²⁶⁾。調査の限り、伊東三女の名を「八重子」とするのは、露伴「頼朝」のみである。ここから、安吾「源頼朝」が露伴「頼朝」を典拠にしていた可能性は高く、少なくとも頼朝の流人時代を描いた部分、(12)伊東三女との恋、(13)伊東三女Ⅱ「八重子」については、露伴作品を参照したと見られる。

さて、残る(14)日暮しの森での密会だが、この部分に関しても、露伴「頼朝」を参照したものと見られる。まず、「八重子」の名を採用しているのもその根拠のひとつだが、日暮しの森について、安吾が実験的に知らなかったということも根拠として挙げられる。先述したように、安吾は伊東市内の地理に精通していたようだが、「源頼朝」本文においては、次に挙げる【引用12】のように、「日暮しの森が今ほどのあたりだか私は知らない」と述べている。このことを踏まえると、頼朝が日暮しの森で夜を待ったという逸話も、何らかの資料を介して知ったと見るのが適当である。日暮しの森の伝承を記録するものには、前出『増訂豆州志稿』があり²⁷⁾、そこには、「日暮森 岡村二在り源頼朝、八重姫二会セントテ日ヲ此ニ暮ス故ニ名クト云」(巻五・林叢部)とある。安吾が『増訂豆州志稿』を見ていないと推測される以上、露伴が『増訂豆州志稿』中の日暮の森の記事を採用するか現地調査するかし、それを更に安吾が引き写した可能性が高い。安吾は、八重子との密会の手引きを女中がしてくれたとするが、それも、【引用14】、【引用15】に見られるような露伴の記述に着想を得たものと思われる。頼朝と八重姫との間をとりもつたのが臣下や侍女であるとい

う推論を持つ文章は、管見の限り、全時代の資料・文章を通して露伴作品のみである。

【引用12】坂口安吾「源頼朝」

日暮しの森が今ほどのあたりだか私は知らないが、直径四五寸もある大きなクモとムカデは伊東の木蔭の名物だ。「…」アイビキの手びきは八重子の侍女がしてくれたようだが、森の中にひそんで女中の合図や日暮れをボンヤリ待っている顔大短身の三十男に数年後のサッソウたる源氏の大将の武者振りを想像することは不可能だ。

【引用13】幸田露伴「頼朝」

伊東の岡村といふところの日暮の森といふのは、頼朝が八重姫に会はうとて、思を懐く杜の下蔭に機を待ちつゝ、日を暮らしたところだと云ひ伝へられて居る。

【引用14】幸田露伴「頼朝」

頼朝と八重子との情交は、頼朝の方から仕掛けた事か、中に居て取持したものがあつたか、一切不明不詳であり、「…」

【引用15】幸田露伴「頼朝」

抑々頼朝が蛭が小島に流された最初から兵を挙ぐる迄の二十年間といふもの、頼朝の生活と体面とを支へて居たものは誰であつた

かと云ふと比企尼なのであつた。「…」此の頼朝に取つて実在に難がった乳母に娘が三人有つた。其の長女の婿は頼朝謫居の間少しも傍を離れずして忠実に親切に仕へたところの大功臣藤九郎盛長其の人なのである。それから二女の婿は河越太郎重頼なのであつて、それから第三女の婿は「…」八重姫の兄、伊東祐親の二男、伊東九郎祐清なのであつた。「…」頼朝に随従して居た藤九郎の妻は、蓋し頼朝の為に濯ぎ洗濯も為たらう、朝夕の床の上げ下しや、三度の食膳の世話も為たのであらう、其の女の妹が祐清の妻で伊東の邸に居たのであるし、伊東はまた頼朝の旧家人なのであつたから、女同士は近しい中なり睦び合へる中なり、男同士は相婿なり主従なり、頼朝も伊東の邸へ行き、祐清夫婦も盛長が処即ち頼朝の許へも往復した事であらうから、何時とも無く頼朝八重姫は顔も見おぼえ声も聞き慣れた事だらう。そこで二人の間に恋がおのづから成り立つたのか、或は又盛長祐清の夫妻四人の中に取持つたものだから其処は分らないが、いづれにしても八重姫は頼朝の子を挙ぐるに至つた。

見てきたように、安吾「源頼朝」に書かれる情報には、露伴「頼朝」独自の情報と一致するものが見られる。このことから、安吾は、露伴作品を参考にした可能性が高い。

三―三―二 作品制作にあたっての利用

つづいて、方向性・枠組みの設定や頼朝の人物像造形など、作品制

作にあたって、安吾が露伴作品の影響を受けていることを指摘する。

三―三―二―一・方向性・枠組みでの取り込み

安吾が露伴作品を参照していたことは、第一に、作品の方向性が一致していることに表れている。

「源頼朝」は、従来の頼朝像（義経を殺した冷血漢）の書き換えを意図した作品である。独自の人物像の確立は、「源頼朝」に限らず、安吾が目標としたものだった。「安吾史譚」中、「道鏡童子」（『オール読物』、昭和二十七年二月）、「直江山城守」（同誌、昭和二十七年四月）、「小西行長」（同誌、昭和二十七年六月）においては、人物像が既成のイメージから反転されているということを、原が指摘している²⁸。

また、同時期に発表された「信長」（『夕刊新大阪』、昭和二十七年十月六日）昭和二十八年三月七日）が、巷間の信長像を書き換えようと思図したものであったということは、谷口克弘が指摘するところである²⁹。「源頼朝」においても人物像の書き換えが図られたわけだが、その際、同じ試みを持ったものとして先行する、露伴「頼朝」が参考にされた可能性が高い。「引用16」、「引用17」に見られるように、両者とも、義経を殺したことにより頼朝が不当に評価されているとして、人物像の再造形を図ったものとなっている。また、その際の仮想敵として、所謂「判官蠱虜」的風潮が設定されている。

【引用16】 坂口安吾「源頼朝」

彼「頼朝」の施策は悪に対しては厳格であつたが、民の生活へ

坂口安吾「源頼朝」における幸田露伴「頼朝」の受容

のイタワリ、また彼らの安穩な生活を保証することをもって政治の当然な義務の一つと見てそれに副う施策に絶えず意を用いていたことも、その根底に別に思想というほどのものもないのだが、その代り大地から生えたような安定感がある。それは彼自身の生活や生き方などを心棒に編みだされたものだからであろう。つまり、彼の私生活は自分の政治を裏切ることがなかった。[…]

私は判官ビイキにも反対ではないが、義経には民を治める特別の識見も才能もありやしない。その点になると月とスッポンぐらの差があるから、判官ビイキの観点だけで二人の人物を比較するのは全然お話にならないのである。

【引用17】 幸田露伴「頼朝」

世に判官蠱虜といふ言葉がある。「…」判官蠱虜の出て来るのは実に人情の自然で、誰しも判官を好いて景時頼朝を悪む。「…」頼朝も亦景時同様に判官蠱虜の心からは余り好くは思われぬ人である。中には判官蠱虜が高じて、頼朝は大功の有る弟の義経を猜み忌んで遂に之を殺した、残忍な人である、刻薄な人である、義理も人情もない人であると云つて酷論痛罵する人もある。「…」たゞ判官蠱虜の餘りに人は頼朝を甚だしく悪く言ふが、「…」頼朝は何様いふ履歴を有つた何様な人なので有らう。

頼朝像の書き直しが図られるのは、歴史研究史上珍しいことではない。近代に入つてからは、特に大正末から昭和にかけて、さかんに

われたようである³⁰。だが、その多くは、歴史研究である以上、頼朝を政治家として再評価するものであり、頼朝の人間的側面を描いたものではなかった。これに対して、露伴「頼朝」は、明治期に書かれながら、頼朝の人間の側面を全面に出す、最初の文学作品となっている。また、安吾が、頼朝の政治家としての手腕を評価するとともに、それを形成したのが頼朝の人間の側面であったとしたことは、【引用16】傍線部から確認できる。加えて、安吾が頼朝の政治能力を評価しているといっても、分量にして作品全体の1割に満たず、作品の大部分は頼朝の人間の側面を描くのにあてられている。つまり、二作品は、頼朝を再評価するにあたり、頼朝に人間的側面を付与するという方向において一致している。このことから、安吾が、頼朝像を書き直すという同じ試みをもったものとして先行する、露伴の手法を参考にすることが有力視される。なお、安吾が、頼朝の人間の側面を露伴とは異なるかたちで提示しようとしたことは、「二三四―」で述べる。

第二に、作品の枠組み・頼朝の生涯の描き方の点にも、安吾が露伴作品を参照していたことが表れている。露伴は、頼朝が伊豆で挙兵するまでの前半生を描き、その後の事蹟は、随所に挿話として書くに留める。一方の安吾も、政治家としての頼朝を評価しつつ、作品の九割以上の分量を、伊豆での挙兵・石橋山での敗北までの前半生を描くのにあてている。伊東から北条への逃走以降を描くか否かが相違点となっているが、前半生を集中して取り上げるといふ、頼朝の生涯の切り取り方が、二作品で共通している。頼朝の人間の側面がうかがわれる逸話としては、頼朝の後半生・鎌倉幕府を開いた後の、『吾妻鑑』

建久四年（一一九三年）「富士の巻狩り」³¹があり、愛山は、『源頼朝』（玄黄社、明治四十二年七月）においてこの逸話を取り上げ、頼朝が残忍ではない根拠のひとつとしている。安吾は、徳川家康について愛山の史伝『徳川家康』（独立評論社、大正四年七月）を読んでおり、頼朝についても愛山『源頼朝』を読んでいたことが推測される。だが、安吾「源頼朝」ではこの逸話は採用されていない。頼朝の前半生を描くことに力点を置く露伴の書き方を踏襲したために、愛山『源頼朝』を用いなかったものと推測される。

三―三―二―二、頼朝の人間の側面を描くにあたっての、逸話の解釈・

利用の仕方的一致

もちろん、冷血漢のイメージを書き換えようとするのなら、頼朝の人間の側面を描こうとするのは自然な流れであろう。だが、それに際して用いられる逸話の解釈と利用の仕方が、以下に示すように両作品ではほぼ同じであることから、安吾が、露伴「頼朝」を参照していた可能性は高い。

まず、平治の乱後に捕えられた頼朝が、平氏方に「命が助かりたいか」と聞かれる部分。双方とも「命が助かりたい」という言葉を、本心から出た言葉として捉えている。

【引用18】坂口安吾「源頼朝」

彼が宗清に向かつて、

「私はイノチが助かりたい。そして父祖のボダイを弔いたい」

と云つたのは本心からで、六波羅に捕われて死刑を待つ日々にも、父母の卒塔婆をつくるために檜と小刀の差入れをたのんだのだ。

【引用19】 幸田露伴「頼朝」

頼朝に尋ねると、頼朝は、今度の合戦に父も兄弟も皆失せれば僧になつて父上などの後世をも弔ひたき故生命惜し、助かりたく思ふと云つたといふ事である。後の世から見ると、其の様なことを云つて置いて生命を助かつてから平家を滅ぼして仕舞つたのであるから、なんだか頼朝は虚言を吐いて人を謀つたやうであるが「…」頼朝の其の時の其の言葉は虚言で無かつたのだらうと思はれる。生命を助かつて僧法師にもなつてと云つたのは、何様も心から出た言葉で有らうと思はれる。

「命が助かりたい」という頼朝の発言が虚言ではなかつたと判断する根拠として、次に引いたように配流後二十年に及ぶ心からの読経生活をおける点も一致する。特に、傍線部に示されるように、念仏三昧の生活を「殊勝」とする表記レベルでの一致は注目に値しよう。なお、安吾や露伴が依拠し、かつ頼朝流人時代を描く『曾我物語』や『源平盛衰記』には、「殊勝」という言葉は見られない。

【引用20】 坂口安吾「源頼朝」

ところが蛭ヶ小島に流された頼朝はそれからのまる二十年間と

いうものが、ちょっと恋などということもしたが主として念仏三昧に日を暮した。二十年間一日も欠かさずに一日に千百べんずつ念仏を唱えていた。千百べんというのは変な勘定のようにだが、千百べんのは父祖のため、百べんは鎌田政清のためだ。勘定の理屈は通っている。「…」

日常の習慣的な瑣事に至るまで、多忙にかまけて忘れるようなことがないらしく見える。つまり忙しくなると忘れてしまうようなこと、しても、しなくとも良いようなことは一切しない人のようだ。日に千百べんの念仏なんぞは信心のない者にはどうだつてかまわぬようなものだが、彼自身にとつては多忙にかまけても忘れられない性質のものなのである。

彼が二十年間念仏三昧の殊勝な生活にひたつていたのは、池の尼の訓戒が身にしみたせいではない。心底からのものなのだ。

【引用21】 幸田露伴「頼朝」

十四歳で蛭ヶ小島に流されてから、三十四で旗を揚げるまで、二十年の間といふものは、毎日々々千百遍づつ仏名を唱へたのであつて、其の千遍は父祖の菩提のため、其の百遍は鎌田政家菩提の為と云ふのであつた。「…」二十年の間の毎日の勤行といふものは、中々容易に出来る譚のものでは無い、中に一片赤心誠の心があるので無くては、或は懈怠し、或は廢絶して仕舞ふのである。「…」兎に角父の為や政家の為として、二十年七千幾百日間思はず持読したのは、頼朝の亡父を思ひ亡臣を思ふ心の厚いことを證

して居るもので、其の孝心と慈悲心とは誠に普通を超へている。「…」戰場往來の暇無い身になつても、猶亡き父亡臣の冥福を増進しやうとして、佛事の懈怠無からんことを願つたのであつて、其の平日の殊勝の所作も思い遣られるのである。

また、兩作品が、流人時代の頼朝の恋を持ち出していることも見逃せない。兩作品ともこれを初恋と見なしていること、恋する様子に好感を抱いている点も共通する。

【引用22】坂口安吾「源頼朝」

念仏三昧にかまけて恋にオクテの頼朝にとつて、これが初恋であつたかも知れない。「…」とにかく彼の初恋の手口に於てはズブの素人のダラシなさが目立つだけで、その神妙な取り乱し様はなかなか愛嬌があるのである。

【引用23】幸田露伴「頼朝」

十四で伊豆へ来た流人の頼朝も男盛りになつて来た。「…」人の其の実を結ぶ支度に美しい花の咲く時が来て、人生の春の風の暖かさに蒸されて心に和らかみの燃ゆる年頃に到達した。そこで頼朝は因縁有つて祐親の三番目の娘のお八重さんといふのと恋に落ちたのである。「…」何にせよ初恋の事で有つたから、野心の為ばかりに伊東の女のところへ通つたのでは無い事は明瞭である。「…」恋には偉人凡人の隔ても無かつたらう歟、伊東の岡村の日

暮の森といふのは、頼朝が八重姫に会はうとて、思を懐く杜の下蔭に機を待ちつゝ、日を暮らしたところだと云い伝へられて居る。

以上に示したように、安吾が選ぶ逸話は、逸話の解釈・利用の仕方において、露伴作品との一致を見せる。これは、安吾が、頼朝に人間的側面を付与させるにあたって、同方向にある露伴作品を参照したためだと考えられる。

だが、安吾は、単に露伴作品を参照したに留まらない。安吾は、頼朝の人間の側面を露伴とは異なるかたちで提示し、露伴が付与しなかつた性質・性格を付与することで、独自の頼朝像をつくりだしている。

三―四・安吾の頼朝像の造形、安吾の独自性

「源頼朝」における安吾の頼朝像の造形は、「青春論」における武蔵像の造形とは異なり、典拠そのままではない。露伴作品とは異なる頼朝像を提出していること、及び、独自の性格付けと評価を行っていることを確認していく。

三―四―一・凡人、無能な頼朝像の提示——卑俗化・戯画化された頼朝

まず、安吾が、頼朝の前半生を描くにあたり、頼朝を、凡人、無能な人物として描いている点に注目する。露伴「頼朝」の頼朝は理想的な人間として捉えられ、その人間的側面も賞賛すべきものとなつていく。逆に言えば、頼朝の人間の側面が理想的だから理想的人間となつ

ている。このことは、青少年期を描いた章のタイトルが「英気」や「優美」となっていることにも表れている。対する安吾は、理想的な頼朝を描くに留まらず、次の引用に見られるように、繰り返し、不恰好でか弱く、情けない頼朝も描いている。その際、頼朝は戯画的に描かれる場合が多い。

【引用24】 坂口安吾「源頼朝」

天下の平家を敵にまわして一手にひきうける源氏の嫡男の威風なぞはどこにも見当らない。イノチを助けてもらつて父祖のボダイを弔いたいというだけのミミッチくて、メソメソと、しかしシンから思いつめたマッコウ臭い十四の小僧にすぎないのだ。虎が猫に化けているわけではなくて、元々タダの猫にすぎないのである。特にメソメソしたセンチな仔猫なのだ。

【引用25】 坂口安吾「源頼朝」

伊東を逃げての頼朝はしばらくヤブレカブレの心境だつたかも知れない。北条の娘に恋文を送つた打算的なところなどは、彼が將軍となつて行つた経綸の堂々と正道を行く策やかケヒキにくらべると、いかにもミジメな窮余の策で、後日の彼の真骨頂たる風格とは遠いものがある。

【引用26】 坂口安吾「源頼朝」

三十の頼朝は恋人のオヤジの入道が自分を殺しにくるときい

て、あの入道に見こまれてはもはや逃げるスベもない。さりとして、身は潔白でありながら自殺するのも理に合わないから、運を天にまかせて逃げてみよう、なぞと真夜中に馬にまたがり泡を喰らつて逃げ出すような哀れさである。矜持の喪失も甚しいと云うべきではないか。

【引用27】 坂口安吾「源頼朝」

だから彼が感動に逆上亢奮して拳兵した当初というのは、まるでもう足が地を踏んでいないようなダラシなさであつた。「……」この初陣に当つての頼朝の亢奮というものは甚だ大人気ないものであつた。

露伴と安吾が同じ逸話を扱っている部分を比べてみると、頼朝について、露伴が理想化を、安吾が卑俗化・戯画化を図っていたことが明らかである。【引用29】、【引用30】に、頼朝の恋についての描き方の違いを見ておく。先に確認したように双方とも頼朝の恋には好意的であるが、恋する頼朝の描き方に関しては対照的であり、露伴は政治的な駆け引きをも内包させて詩的に、安吾は滑稽に描いている。

【引用28】 坂口安吾「源頼朝」

念仏三昧にかまけて恋にオケテの頼朝にとつて、これが初恋であつたかも知れない。顔大短身の念仏青年がたぎる血を押え、はやる心を押えて日暮しの森の中にジツとうずくまつている様を考え

ると珍である。日暮の森が今ほどのあたりだか私は知らないが、直径四五寸もある大きなクモとムカデは伊東の木蔭の名物だ。彼の大きな顔の内部では、恋人のほかにもクモやムカデについても多少の意識が騒いだり絡んだりすることはあつたらう。不足分の念仏を森の中で間に合わせていたかも知れん。アイビキの手びきは八重子の侍女がしてくれたようだが、森の中にひそんで女中の合図や日暮れをボンヤリ待っている顔大短身の三十男に数年後のサツソウたる源氏の大将の武者振りを想像することは不可能だ。とにかく彼の初恋の手口に於てはズブの素人のドラシなさが目立つだけで、その神妙な取り乱し様はなかなか愛嬌があるのである。

【引用29】幸田露伴「頼朝」

十四で伊豆へ来た流人の頼朝も男盛りになつて来た。「…」人の其の実を結ぶ支度に美しい花の咲く時が来て、人生の春の風の暖かさに蒸されて心に和らかみの燃ゆる年頃に到達した。そこで頼朝は因縁有つて祐親の三番目の娘のお八重さんといふのと恋に落ちたのである。「…」頼朝のやうな小さくない人物といふものは「…」右をも左をも見ながら地道に履む人で有るから、虚でも何でも無い恋の情の傍に伊東を力にしようといふ考えも交つて居り、伊東を頼みたいといふ意の欲の側に遣る瀬の無い床しき懐かしさを湛へて居た事なのでも有らうか、何にせよ初恋の事では無つたから、野心の為ばかりに伊東の女のところへ通つたのでは無い事は明瞭である。「…」恋には偉人凡人の隔ても無かつたらう歟、

伊東の岡村の日暮の森といふのは、頼朝が八重姫に会はうとして、思を懐く杜の下蔭に機を待ちつゝ、日を暮らしたところだと云い伝えられて居る。

以上に示したように、安吾の頼朝像では、一般的な理想の人物像からは外れる性質が強調される。また、戯画化により、頼朝の「格好の悪さ」は、一層強調される。だが、不恰好で、か弱く、情けない人物像を与えられた頼朝は、理想の対象とならない代わりに、「格好の悪さ」や「弱さ」から生じる親しみやすさを獲得している。安吾は、露伴の頼朝像にはない、頼朝に無能な凡人像を提出したのである。

三—四—二・独自の性格付けと評価——素直さ、生き方に根付く政治

次に、安吾独自の、頼朝の性格付けと評価を行っている点に注目する。まず、安吾は、頼朝を「甚しく素直」であると評する。急場に臨んで、「命が助かりたい」と本心を述べることで、頼朝には「自己を正しく表現しうる天才がある」として評価しており、この素直さ（本心を率直に表現する力）を、「源氏の長者としての矜持」と見なしている。敗北者が、「父も兄弟も皆死んだから自分も死ぬ」と述べる「慣用」は、潔さと憐れさを伴う一種の様式美となっているが、安吾の頼朝が持つ素直さは、その様式美を捨てて、何としてでも生き残ろうというものである。つまり、この素直さも、「格好の悪さ」や「弱さ」に通ずるものとなっている。安吾がこれを評価していたことから、「格好の悪さ」や「弱さ」は、安吾にとって、肯定すべき対象であつたこ

とがうかがえる。前項で、安吾が、頼朝を凡人として提示しているということを確認したが、「格好の悪さ」や「弱さ」を持つ凡人であることこそ、安吾の評価する点となっているのである。

【引用30】坂口安吾「源頼朝」

特に慣用というものには実体がなくて立板を流れる水のように習性があるだけのものであるから、

「戦に負けて父も兄弟もみんな死んでしまったから……」

と言いかければ、あとは立派に立板に水で、

「なんの望みがあつてオレだけ一人この世に生き永らえていたいことがあるものか」

と云つてしまう。こういう急場で慣用の文句を思いついて云いかければ、あとは人間オームのようなものさ。

ところが頼朝はオームにならなかつた。とにかく彼は非常に生きていたかつたのだ。「…」生き永らえたいという本心を忘れるどころか、思いだしてしまつた。つまり彼は甚しく素直なのかも知れん。「…」これを顔大短躯の表現と云うのかも知れん。あるいは非常に運動神経の発達した云い廻しで、変に応じて虚々実々に自己を正しく表現しうる天才があるのかも知れない。

次に、政治家としての頼朝の手腕を評価する際にも、独自のものが見られる。【引用24】に挙げるように、安吾は、政治運営のあり方を頼朝自身の生き方に結びつけ、世間通・人間通の安定した政治家とい

う新たな頼朝像を提示している。ここで言われる頼朝の生き方とは、本心に素直に、率直に生きるというものであり、そのような生き方に根付く政治が評価されている。つまり、この政治への評価は、頼朝の素直さ、「格好の悪さ」や「弱さ」を持った凡人への評価に連なるものとなっている。弱者であるからこそ安定した政治家になれたという、逆説的な歴史観・偉人観こそ、安吾独自のものである。

【引用31】坂口安吾「源頼朝」

彼の施策は悪に対して嚴格であつたが、民の生活へのイタワリ、また彼らの安穩な生活を保証することをもつて政治の当然な義務の一ツと見てそれに副う施策に絶えず意を用いてきたことも、その根底に別に思想というほどのものもないのだが、その代わり大地から生えたような安定感がある。それは彼自身の生活や生き方などを心棒に編みだされたものだからであろう。つまり、彼の私生活は自分の政治を裏切ることがなかつた。

以上に示したように、安吾は、露伴の影響下に留まるのではなく、それまででない、滑稽な「格好の悪さ」や本心への素直さ、政治のあり方に表れる「弱さ」を頼朝に付与し、強調することで、独自の頼朝像を造形している。従来の頼朝像を書き換えるうえで、人間的側面を具えた人物という点では先行作品を採用する一方で、理想的な頼朝像という面は捨てているのだ。ここから、「源頼朝」が書かれる際には、露伴作品が取捨選択的に利用されたということが言える。気軽なエツ

セイでは手近な鷗外などをそのまま使う一方、本格的な歴史評論では、近代の先行作品を踏まえながら独自性を出していったのである。

安吾は、凡人で弱者であるからこそ優れた為政者となったという独自の頼朝像・歴史観を提出するに至った。「安吾史譚」他作品を見ても、従来の英雄像を卑俗化するのが、安吾特有のスタンスであったと見られる。

なお、本格的な歴史関連作品を書く際にも、完全なオリジナルを書くのではなく、先行作品を利用したということに関しては、原因として、安吾が多作な作家であったことが考えられる。歴史関連作品だけでなく、他のジャンルにおいても作品を多数発表していた安吾は、既成の作品を利用することで時間を節約し、現実問題としての作品生産をこなしていたのであろう。

四・おわりに——安吾の歴史関連作品の生成

以上に示したように、坂口安吾の歴史関連作品には、先行作品を転用したものと、先行作品を意識的に利用したものとが見られる。歴史関連作品のうち、「青春論」には、森鷗外と吉田精頭の転用が確認できる。気軽なエッセイの場合には、手近な作品が利用されたのである。対して、本格的な評論である「源頼朝」においては、頼朝を描く際に幸田露伴の作品を摂取した可能性が高いものの、取捨選択的な利用がなされており、安吾独自の人物像の提出が見られる。作品の性格によって、先行作品の受容のあり方に違いが生じているのであり、安吾の独

自性は、本格的な評論に表れやすい。

本稿では、これまで明らかにされてこなかった安吾の歴史関連作品の典拠について確認し、作品の生成について考察した。紙幅の都合上、二作品のみを扱ったが、未だ解明されていない作品の典拠を明らかにする余地はあろう。また、作品生成の歴史的背景の解明も望まれる。今後、歴史関連作品の分析を通して、安吾の関心、思想、歴史観、表現手法、独自性が明らかになることが期待される。

【付記】

安吾作品の引用は初出に依り、本文異同の確認については、初収単行本、筑摩書房版全集を参照した。漢字は常用漢字体に改めた。

【謝辞】

安吾所蔵の幸田露伴『史伝小説集 巻二』の調査にあたっては、坂口綱男氏と安吾ミュージアムの方々に全面的にご協力いただきました。この場を借りて厚く感謝申し上げます。

注

- (1) 浅子逸男「坂口安吾の歴史小説——「二流の人」から「信長」へ」『花園大学国文学論究』、平成二年十月。
- (2) 川村湊「坂口安吾の歴史観」『国文学 解釈と鑑賞』、平成五年二月。
- (3) 松本常彦「安吾の歴史小説の書法について」『国文学 解釈と教材の研究』、平成十七年十二月。

- (4) 谷口克広「坂口安吾の織田信長」『国文学 解釈と教材の研究』、平成十七年十二月。
- (5) 原卓史『坂口安吾 歴史を探偵すること』、双文社、平成二十五年五月。
- (6) 原卓史「二流の人」論——黒田如水「坂口安吾 歴史を探偵すること」、双文社、平成二十五年五月。
- (7) 原卓史「家康」論「坂口安吾 歴史を探偵すること」、双文社、平成二十五年五月。
- (8) 原卓史「吉川英治と坂口安吾」『国文学 解釈と鑑賞』、平成十五年十月。ただし、この根拠としては、安吾が吉川「宮本武蔵」を高評価していたということが示されるに過ぎない。
- (9) 座談会「昭和十六年の文学を語る」『現代文学』、昭和十六年十一月。
- (10) 刀の試し切りをする際などに用いられる、罪人の死体のこと。
- (11) 池辺義象が肥後藩武蔵遺蹟顕彰会の委託を受けて執筆する。金港堂書籍、明治四十二年四月。
- (12) 都甲太兵衛の基本資料。都甲家十代、都甲源藏者、成立年月日不詳。都甲家に伝わる、都甲太兵衛の基礎資料。内容は二部にわかれ、前半は、都甲家十代までの事蹟を、後半は、さまざまな記録類から抜萃された、初代太兵衛に関する逸話の抄録を収める。東京大学「鷗外文庫 書入本画像データベース」http://rarebook.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/ogai/data/G27_213.html（最終アクセス：平成二十八年十月五日）。
- (13) 山崎一穎「鷗外・史伝『都甲太兵衛』論」（『跡見学園女子大学紀要』、昭和五十二年十月）ほか。
- (14) 豊田正修、宝暦五（一七五五）年。宮本武蔵の伝記。武蔵の関係者に取材をしたものとなっているが、武蔵死後百年以上が経過してから書かれたものであり、虚構性が指摘されている。本稿では、牧堂文庫旧蔵（現在は熊本県立図書館蔵）の写本を底本とする、播磨武蔵研究会編注「武公伝」を使用した。播磨武蔵研究会「武蔵伝記集 武公伝解題」<http://www.geocities.jp/hitemusasi2de/bukouh200.html>（最終アクセス：平成二十八年十月五日）。
- (15) 豊田景秀、安永五十一（一七七六）年。宮本武蔵の伝記。景秀は「武公伝」の著者、正修の息子であり、「二天記」は「武公伝」を加筆・修正して書かれた。「二天記」独自の記述が散見され、「武公伝」と同じく、虚構性が指摘されている。本稿では、武藤巖男等編「肥後文献叢書 第二巻（隆文館、明治四十二年十月）所収「二天記」を使用した。
- (16) 吉田文の「巖流島の戦い」は、宮本武蔵遺蹟顕彰会「宮本武蔵」における、以下のエピソードに依拠する。「武蔵の影の向ふに見ゆるや、憤然として進み、水際に立て云ひけるやう、我は期に先ちて来れり、汝何ぞ約に違ふことの甚しき、嗚呼汝おくれたるかといふに、武蔵は聞こえぬふりして黙然たり、小次郎益々怒り、今は堪へかねたるにや、霜刃を抜いて鞘を水中に投じ、猶進みよりて、その近づくを待つ、時に武蔵水中に踏み留まりて、莞爾と笑つて小次郎負けたりといふ、小次郎怒りて何が故に我負けたるかと問へば、武蔵、勝たば何ぞその鞘を捨むといふ、小次郎いよく怒り、刀を真甲に振りかざして「……」この部分における「問答」は、それ以前の武蔵の伝記には見られず、顕彰会「宮本武蔵」に至って創作されたものである。
- (17) 「イノチガケ」（『文学界』、昭和十五年七月・九月）から「狂人遺書」（『中央公論』、昭和三十年一月）まで。
- (18) 『参考平治物語』は、元禄六年（二六九三年）に今井弘濟内藤貞顕によって編纂された（水戸本）。本稿では、大正三年にこれを再出版した国書刊行会本を利用した。
- (19) 『祖が物語』…穴山孝道肯定『祖が物語』上宮、岩波書店、昭和十四年十月。『愚管抄』…遠藤元雄口中『具管抄』、雄山閣、昭和十一年一月。蔵書調査にあたっては、坂口綱男氏と安吾ミュージアムの方々に協力いただいた。
- (20) 萩原正平・正夫、明治二十一年〜二十八年。寛政年間に秋山富南が編纂した稿本を、萩原親子が増補・公刊した。
- (21)

- (22) 出口智之「幸田露伴『頼朝』論——露伴史伝の出発——」「国語と国文学」、平成二十二年四月。
- (23) 伊東市岡区広野 1601。三千代夫人によると、伊東滞在時、安吾は散歩を日課にしていた。
- (24) 三千代夫人によると、「頼朝の恋人の墓も、坂口がさきに発見して来て、私に教えてくれた」（坂口三千代「かりの宿」『クラクラ日記』、文芸春秋、昭和四十二年三）とのことだが、確認した限り、伊東市内には該当する宮・神社が見当たらなかった。伊豆の国市中篠には、「八重姫」を祀ったことに縁起を持つ満願寺があるが、こちらは安吾の自宅からだとは徒歩圏外になる（距離約三十キロメートル、市間には山が横たわる）。
- (25) 山路愛山「頼朝は如何なる人ぞ（三）頼朝の品性。（下）」『源頼朝』、玄黄社、明治四十二年七月。
- (26) 吉川英治「源頼朝」「朝日新聞」、昭和十五年一月〜十月。
日暮の森の伝承を記録するものには、他に「伊東村誌」（明治二十二年〜明治三十八年）があるが、「日暮しの森にて頼朝と八重が密会した」というものであり、安吾「源頼朝」や露伴「頼朝」が採用した逸話（頼朝は日暮しの森で日暮れを待ち、日が暮れてからは音無しの森で八重と密会した）とは異なる。このことから、安吾が『伊東村誌』を見ていたとは考えにくい。
- (28) 原卓史「『安吾史譚』論」「坂口安吾 歴史を探偵すること」、双文社、平成二十五年五月。
- (29) 谷口克弘「坂口安吾の織田信長」「国文学 解釈と教材の研究」、平成十二年十月。
- (30) 遠藤元男『源頼朝』、白楊社、昭和十三年五月。「大正の末年から昭和にかけて頼朝が再び取り上げられ、その政治家である点が強調されたことは如実のその時代の社会を反映したものである。」（p.32, 16-7）
- (31) 富士野での狩猟において、息子の頼家が鹿を仕留めたことを喜び、頼朝が妻の政子に書状を送るが、政子に「武將の嫡男であるならば当然」

としてたしなめられる。頼朝のわが子への愛情が示される逸話として、山路愛山「源頼朝」には取り上げられる。